

クローン人間の物語が問う 生きることの根元的な意味

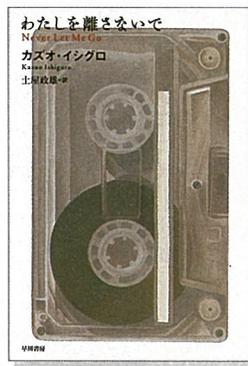
評者 北村行伸 一橋大学経済研究所教授

臓器売買による腎臓移植が発覚したかと思えば、さらに病気で摘出された腎臓までもが移植に用いられていたことが明らかになり、波紋が広がっている。確かに、日本移植学会の倫理指針では生体腎移植は親族間に限られており、第三者からの提供は原則として認められていない。当然ながら、供給される臓器は限られている。一方、腎臓病患者が血液をろ過するために人工透析を定期的に行なうことの負担は非常に大きく、腎臓移植を望む患者は多い。この根強い生体腎移植の要求に誰がどのように答えればいいのか。

今

紹介するのは、現在最も高い評価を得ている作家の一人であるカズオ・イシグロの最新作である。テーマは臓器提供を前提としたクローン人間である。凡庸な作家であれば、臓器移植をめぐる医師と患者のやりとりや国家の倫理と人間の尊厳などについて書くのだろうが、イシグロはクローン人間の学園生活に焦点を当

て、しかもクローン人間の話であることがほとんどわからないような筆致で淡々と物語を進行させていく。クローンヒツジであれば数年もすれば成長するだろうが、ク



早川書房 1800円

ローン人間は成人に達するまでに二〇年を超える年月が必要になる。また、感情もあれば知性もあるもので、いずれ臓器提供者になることが運命づけられていたとしても、ある程度の情操教育を行なったり、健康維持を図ることが必要になる。もし、われわれがクローン人間であれば、何を望んで生きていくだろうか。もし、クローン人間がきわめて優れた資質を持っていれ

ば、臓器提供以外に、その資質を伸ばして人類のために貢献することとは認められないのだろうか。そしてなにより、クローン人間は愛する人と新しい生活を始めることは許されないのだろうか。イシグロの想像力の世界の中で、われわれはクローン人間をどう受け入れ

ればいいのかという切実な問題に迫られる。

われわれの目の前にある臓器移植の問題に底の浅い倫理観を振り回す前に、稀代の作家の手になるクローン人間の物語を静かに読んで、人間の業の深さや生きることの悲しみを受け止めてほしい。